

期四 三月二十六日(日)

互普根 照蓮院
康川林 東福寺

史蹟めぐり資料(第十四回)

越谷市郷土研究會

瓦曾根村

瓦曾根村は江戸より行程凡そ六里、民戸百五、東は西方村、南は登戸村、西は越ヶ谷宿、北は小林村なり。東西へ凡そ八町、南北十町許、日光道中村を横く。相伝ふ当村は古へ浅見大寺、須賀大炊介、同雅楽之助、同玄藩同將監など言えるもの末で開拓せしと云、御打入の晴より御料所にして、今も御代官支配す。餘地は前村と同じく元録の度札あり、其後寛延二三年の検地は吉田源之助、稻守助右衛門等札せり。高札場(村の中程にあり)。小名・本村、後谷、野尻、木ノ下、標田、大田切

元荒川

附瓦曾根溜井、溜井は別に設けしにあらす、元荒川の流左右を村に於て穿ち廻り、市八十里程、長さ六百八十回程、其中に堰を設けて水の差引をなす。堰より下は又元荒川の流夫差五し、後穿ち廻りたる所は溜井のさまなれば瓦曾根溜井と高へ、人の知る所な、この前八條、本吉田、河野、西野、四ヶ領の用水にして皆瀬、越谷、新方三ヶ領の悉水をも此に落せり。故て七ヶ領組合へり、此用水は享治四年成りて、本町上水及び八條領用水となりしか、後本町上水やみてより、八條領のみの用水なりしを、享保三年伊奈半左衛門、石川は夫等奉りて、高利用水曉さくの時、吉利根川の水を増林村にてせき分、此溜井の助水となし、今の如く四ヶ領の所水となせり、溜井の存命と見るべし。

河岸堤

元荒川にあり、安永四年村民等願して、運上の河岸堤となせり、今より江戸迄船路九里餘

稻荷社

村の傍にあり、照江院の枡

末社

水神、泡瀆神

辨天社司方の持なり

天神社

最勝院の枡

照蓮院

将義真堂、妙師那金剛金蓮院の本、慈成山徳源寺と号す。御承院五石は、天正九年より賜われり。本尊弥勒を奉ず。

鐘樓

寛延二年鑄造の鐘をかく。

大師堂

最勝院

前行の本なり、本尊玉佛齒を安置し。

大龍院

羽黒行人衆の修験にて、江戸日本橋川邊の町下本尊は不動を安置せり。

○ 宝珠院

当山修験、下総國葛飾郡桑比忠村、取忠院
山下、是も不動尊と本尊とせり。

○ 別當堂

長勝院の持
正親旨を安す。

舊家者彦左衛門

代々名主を勤む。中村彦左衛門一宗が子孫にして、先祖宗東照宮より賜わりし由、信國の短刀を藏せり
按て、家系日記、慶長五年六月廿六日、沼津城に於て、中村彦左衛門尉、慶長を獻す、大久保相模守忠勝

本田佐治正信等、此城に迎へ奉て大神君下謁す。此の日三嶋に着御とあり、此の時信國の太刀を賜ひしにや、又(武徳編年表)
には、慶長六年六月廿六日、中村式部次輔一宗が弟彦左衛門一宗が沼津の城に入り、御昼飯を獻す、則ち信國の脇差を手らるる事
とあり、慶長六年六月廿六日は恐らくは慶長五年六月廿六日なるべく、短刀を藏する事及家に伝はる所、且記録に載たる事跡と
類したれど、外に如とす、まことにほなく、しかのみならず、中村を以とするものも、此のみに非ざれば、いかにあらん、先に彦左衛門を
伝へざれば、定かなることを知らず、今の彦左衛門あり七世の祖先彦左衛門の時、当村に上着せる由、今の彦左衛門越谷齋米買上口の
御用を勤め、其事に力を盡せしかば、天明年中、藩方は其身一代、苗字は永く御免、且月俸一口をたまひしに、其後、被御用
急らざりしかば、寛政年中、五口を曾し賜りしより、今に大口を賜へり。
祖父彦左衛門も、奇特の所業をまぐありしと云。

備考

新編武蔵風土記綱

卷之五

目一六九下段 十三行
至一七〇下段 十三行

東山林村

小林村は三河より大里の行程なり。途程は元禄十年酒井河内守紀七郎、東西南北共廿四町、南は元荒川を隔て乃瀨根村・西方向。西は惣所用水堀を越えて越ヶ谷宿及花田村・東は増林村・北は花田村なり。民戸百七軒。此宿松文書スル三年の程に、小林村の名をのす。当村の事ならんか、されど郡内善蒲領及住原郡にも此名あり。定かには云盡し、用水は乃瀨根村より引來れり。古より御料所なり、其餘花田村境は新田あり、鄰近三斗、塩谷八斗云、岩松並有舊代族地あり、高杉場あり。

小石 浅組組

野中組 高野組

元荒川 南の方を流る 幅二十間許

神明社 村の鎮守なり 古檀に侍

○ 水神社 村長 持

素禰寺 行末百三十三、乃瀨根村忍蓮院末、小林山と号す 延寶五年正月にす、水尊と座定哉。

鐘樓 寛政三年の 鐘をかく。

菰師堂

○ 蓮泉院

同宗同末、下並下町、藤と号す。 本尊地藏と号す。

○ 東光院

菰山と号す。 本尊 藥師。

○ 觀音寺

松尾山と号す。本尊十一面觀音と号す。

香取社

○ 觀音堂 本尊觀音

備考

原玉類之八新方領

新清氏傳流土記稿三卷

貞享七上段三行終

武田家二十四將種山伯耆守と秋山家

清和天皇より才五代・源賴朝の子新羅三郎義光三代の孫に信義が誕生した。この信義から武田の姓を承継して
 いる。この信義に二人の子があった。長男を信光、二男を光朝と称した。そして長男の信光が武田家を興いた。
 また二男の光朝は、今後登上して来るところの秋山家の祖となっているのである。

有名女川中島の戦での主人公、武田信玄は信光の孫十二代、信虎の子として生れている。

武田家は代々甲斐の國を領していた。信玄は、元徳三年十月、京都進出の一端として三方原で討つることになり、激戦の末これを
 破した。たまたま、その途上で織田信長・徳川家康らの連合軍と三方原で討つることになり、激戦の末これを
 打破り、更に進撃をはかったところが、天正元年に織田方より講和が打ち出されたが、信玄はこれを受付けな
 かったのでまたまた、武田が織田で争が生じたのであるが、その年の四月下、信玄はおしくも陣中でなくなつた
 のである。其後は、一忒戦争の危機は去つたがにみえたが、天正三年に三河國(愛知縣)長篠を豊臣に再度、武
 田方と織田徳川方の連合軍と戦をまじえた。この時の戦で武田家は惨敗を喫した。世評ではこの戦いを鉄砲と
 馬の勝負であったと言っている。これ程に織田方の鉄砲に、がいかに上げられたということは、武田方に鉄砲
 に対する政策が甘かったのではないかと述べている史家もある。

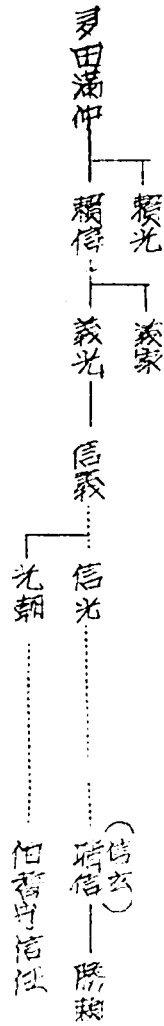
また、この時の戦いで、武田家歴戦の勇將たち大部分が戦死してしまい、この戦がもとで武田家の勢力におと
 りをみせて来ている。従つて二十四將の面々にも戦死してしまつたのも出たであらう。

それから数年後の天正十年二月に、勝頼は織田方に通じた。木曾福島の城主、木曾義昌を討つたため一万五千の

軍勢を以つて諏訪に出陣した。その為信長はこれを助けるべきを家康や北条氏政等に命令を出し、ここに武田方と再度相対することになった。

おしむらくは勝頼は、この戦で敗戦を喫し、天目山のふもと、由野まで来たが、近臣の小山田信茂に裏切りられ甲斐源氏の名門も廿八代でここに亡んでしまったのである。(日本の歴史より)

武田家には、名将・智将が数多くあつた。なかでも武田廿四将と称せられる武將たちは抜群であつた。この廿四将の一人として、穂山伯耆守信任という人がいた。この人の事については、越々谷秘話に(八幡元正氏著)信洲岩村の城主三万石となつており、王家の再興を圖つて秘かに勝頼の一子、幼君千徳丸を擁して武洲七左門村へ落ち延びてきていと記載されているが



武洲七左門村とは、秋山豊政宅の本家であつて(現在は秋山豊政宅の末裔に屋敷あとだけ残っている)この人の言によると、岩瀬城主を襲つて来たのであると言っている。

その後、伯耆守及び家康等は互曾根に移住し、時の至るをまつたが、天運来らず、一子千徳丸も早世してしまひ王家再興の願いも消えたわけである。現在、忍曾根の照蓮院に千徳丸の基石が残っている。その他伯耆守以外の家臣等も同様く地口を崩すべく、地方へ落ち延びて行つたということが伝えられている。

また、戦国の世とは言え、敵であった家康が秘かに武田家の遺臣をかくまっていたということが、日本の「史」に記されている。

従つて、秋山家の祖、秋山伯耆守がここに來てより約四百年余経ており、秋山家がこの地方の藩分であると考へられる。

備考

越谷市の史蹟と伝説 自一三五頁―至一三六頁

④

A.

東小林地区 東福寺

東小林地区 東福寺は、小林山・虚空院東福寺と称し、元互曾根殿蓮院の未なり。

第一世住職は、西國の人にして康暦二二「一三〇〇年」当山の開基となる。本尊は、虚空藏菩薩として、二尺四寸の立像が厨子の中に納められて居り、尚弘法、興教所大師、阿弥陀如来も安置されているが、虚空藏菩薩、両大師ならびに阿弥陀如来のいづれも作者は不明である。境内には往時を偲ばせるかの如く、若狹守が自ら植え育てられたと云われし松の木が数本あり、現在境内には、一と四坪九合三勺ある。

この境内の南よりに薬師堂あり、薬師如来を安置す。薬師堂は現在の本堂より古い建物であり、古の本堂は現存する薬師堂と相違ない小さい建物であつたらしいが、慶長四年頃に全焼したと云われ、その後建てたのが現在の本堂である。

この薬師堂に安置せられる薬師如来は、小林村、東福寺取立頼主須加若狹守と云ふ武士が、南北朝の当時小林村東福寺に背負つて来たと云われ、この如来様はよく服病をなおし下さると伝えられ、現在も尚信仰がたえない又若狹守が自ら植え育てたと云われる鐘樓堂前の松の木は、若狹が非常に大切にしていたことから若狹松の名が残つたものであると云われている。

若狹守の小林村に於て勢力ありしことは、現在増林農業組合長井上竹松氏宅の古文書に依ると、井上氏宅は、元東福寺附近に在り、若狹守の命により、約五百米も離れた現在地に移されたとしるしてあることから考えても明かである。

先日のべん斎師堂についてここに和讃がある。

小林斎師は だれたた。長と大工がおたてある。何が主願願でおたてある。
何も主願はなけれども。花のようなる子をとられ、寺にまいりて花見れは。
開いたお花は散もせず。つばみしお花が散りおらる。花もわが子も同じこと。

以上の和讃が残っている。この和讃は誰が作りしものか、昔からお婆さんたちの言い伝えで現在まで承っていると
言われる

備考

越谷市の史蹟と伝説 白一七六―至一七九頁